神亀元年甲子の冬十月、紀伊国に幸せる時に従駕の人に贈らむがために、娘子に誂へられて作る歌一首　并せて短歌

笠朝臣金村

五四三番

大君の　行幸のまにま　もののふの　八十伴の男と　出でて行きし　愛し夫は　天飛ぶや　軽の路より　玉だすき　畝傍を見つつ　あさもよし　紀伊道に入り立ち　真土山　越ゆらむ君は　黄葉の　散り飛ぶ見つつ　にきびにし　我は思はず　草枕　旅をよろしと　思ひつつ　君はあるらむと　あそそには　かつは知れども　しかすがに　黙もえあらねば　我が背子が　行きのまにまに　追はむとは　千度思へど　たわやめの　我が身にしあれば　道守の　問はむ答へを　言ひ遣らむ　すべを知らにと　立ちてつまづく

反歌

五四四番

後れ居て　恋ひつつあらずは　紀伊の国の　妹背の山にあらましものを

五四五番

我が背子が　跡踏み求め　追ひ行かば　紀伊の関守い　留めてむかも